

ペンフレンド 第六章 あきら卒業

中村アキヤ

「謹賀新年、いよいよ今年は社会人ですね。素晴らしい人生が貴方を待っていますように。ご一緒にスキーに行けるのを楽しみに。妹さんによろしくお伝え下さいませ。

あきら様

青木めぐみ

昭和三十五年元旦」

この正月、めぐみは役所の若い人達のグループで菅平にスキーに行った。あきらもひよっとしたらその頃菅平にいるかの知れないというので少しは期待していたらしい。

「菅平にはやはりいらっしやらなかったのね。私達は予定通り十一日のお昼頃こちらに着きました。新聞によると雪があまりないので心配でしたが、無ければ隣で隣のゲレンデへ出張する積もりでした。でも我々がこちらにきてから毎晩雪が降り、全然人影のないゲレンデを独占して、新雪の上を滑ったり転んだりすっかりスキーの魅力にとりつかれてしまいました。

仕事のほうもそろそろ忙しくなりますが、何とか都合してあと二、三回は来ようと思います。今度こそ御一緒させて下さいね。こちらに着いた日の晩に以前に泊ったことのある望岳荘に行ってみました。半ば諦めていましたがその寂れように全くがっかり。

一昨年教えて戴いたおかげでスキーはだいぶ慣れ、いささか（本当にいささかですけど）上達しました。今度ご一緒に行つて教えて戴いたら随分上手？になると思います。そろそろ学校のほう試験がはじまるのではなくて？ がんばって有終の美をがち取つて下さい。東京でお会いするのを楽しみに。

あきら様

めぐみ

一月十四日」

この頃あきらは大学の化学教室のスタッフと志賀高原でのんびりと滑っていた。満員の正月休みを避けて助教授、助手そして大学院の先輩と数日間の合宿を楽しんでいた。これが化学教室の恒例の一種の卒業旅行だった。志賀高原の丸池ヒュッテで夕食後、ヒュッテの主人の撮った高原周辺の四季の風景のカラーズライドを見せてもらった。どれも素晴らしい風景だったが、特に皆の関心を引きしたのは、志賀高原から横手山を経て万座温泉へのスキーツアーの写真だった。

「天気によければ横手山から二、三時間で万座に着きます」と主人。

翌日は終日、どんより曇っていて時々小雪がちらつくスキー日和だった。皆で瘤だらけのジャイアントスロープを何本もこなした。明日帰ることになっているが、あきら達四年生の四人は前夜の写真に刺激されて、帰りは長野経由で帰らずに万座までツアーして万座で一泊し、翌日草津までツアーして帰れば、汽車賃が助かるのでこのコースで帰ることに衆議一決した。

朝八時、やや風があったが、ヒュッテ前からバスで蓮池まで移動し、そこからリフト、ロープウェイ、リフトと乗り継いで横手山の山頂小屋に十一時に到着した。最後の急傾斜のリフトに乗る頃になって風が強くなり、高度があがるに連れて視界が悪くなってきた。遮るものない山頂だから風が強いのは当たり前と自分で納得して、転がるようにヒュッテに入った。薪ストーブが暖かく迎えてくれ、お茶を貰って握り飯を食べた。握り飯の表面は半ば凍ってジャリジャリしていた。

握り飯を食べ終わる頃には風は音を立てるようになり、降雪のスピードが急に増したように感じた。「こんな天気じゃルートもわからないから引き返そうか？」と相談しているとドサツト音がして雪だらけの男が入ってきた。彼に熱を奪われて周囲が急に寒くなった。

「あんたらこれから万座にゆくのか？」

「行こうと思っていたけど、この天気じゃ無理じゃないかと相談しているのです」

「俺は今万座から来たんだけど、風は少し強いけど三時間もあれば温泉に入れるぞ。俺が案内すつから」

「あんたは、ガイドなの？」

「俺か？ ガイドっていうか万座温泉の客引きだあな。さあ、早目に出掛けよう！」

一行は嚴重に身支度を整え、顔面の凍傷を防ぐために鼻先からタオルで覆面をしてその上部をゴーグルで止めた。

その時はお互いに月光仮面みたいだと笑い合う余裕があった。渋峠までは下り一方のルートである。

横手山山頂直下の林のある鞍部までは、狭い急斜面で深雪のためスキー操作はできない。両足を突っ張っても制動が利かず、結果的に直滑降になり最後に全員尻餅をついて止まる。そこからは新潟方面から吹く風雪を右手から受けて、尾根の左側を斜滑降で降りる。ヒューヒュー鳴る風の下でガイドが「こちらです」といって滑り出す。二、三メートルもするとその姿は濃いガスの中に消えてしまう。

ガスが薄くなる合間を狙って順番にガイドのいる地点まで滑りつく作業をくりかえした。

滑り出す角度を少しでも間違えるとガイドのいる地点を通り過ぎたり、または数メートルも低い地点に到着する。そうなると重いザックを背負ったまま深い新雪の崖をエッチラオッチラ登らなければならない。猛吹雪の中でこの作業を繰り返すとスタミナが一気に消耗する。雪が深くてストックを突き刺すと、ミトン（オーバー手袋）のところまでストックが埋ってしまう。

「ガスが薄くなったから、今滑ってこーい」とガイドの声。だが、あきらにはガイドがどこにいるのか見えない。仲間は皆ガイドのもとについたらしい。

「見えないぞー」と怒鳴ったが、先方からは「見えてるぞー」との答え。あきらは雪めくらはなくなったかと一瞬ぞっとした。ゴーグルを外してもなにも見えない。眼鏡をはずしたら遠くでしびれをきらしている仲間がかすかに見えた。

眼鏡についた水滴が一面に凍りついて手では剥がれない。やむなく眼鏡の面を舌で舐めて溶かした。

一時間半苦闘してやっと洪峠の小屋（標高二千百七十二メートル）に着いて小休止した。ビンディングが凍りついてスキーがなかなか脱げない。

「今更横手山には戻れないよな？」「ここから横手山だと登りばかりだよ」「お客さん、このペースではあと三時間はかかる。食うものがあつたらここで食ってしまいな。いい加減で風がやむと思つたんだがな。ここから山田峠の避難小屋まではたいした上り下りはないが、風が強いので油断すると飛ばされつと。出来るだけ皆で固まってな」

これを聞いてみんなこれは容易ならぬと感じたが、誰も不安を口に出さなかつた。出せなかつたのかもしれない。

この頃の防寒具はキルティングのような洒落た素材はなく、防水加工をしたズック地のフード付きのヤッケであるが、それがバリバリに凍ってしまい、防水効果には限界があるので、ヤッケの下セーターは霜がついたように凍っていた。

両手は殆ど感覚がなく、顔は間断なく吹き付ける吹雪に痛めつけられ、右半分は凍傷に罹っていた。視界がわるいのでスキーを滑らすわけにはゆかず、トボトボとスキーを引きずるように歩くのみであった。

山田峠の避難小屋に着けば暖かい飲み物くらいはあるのだろうという甘い期待は無残に打ち砕かれた。ブロック材でできた公衆便所のような無人小屋の内部は何もなく、吹き込んだ雪が融けては凍ることを繰り返したとみえ、土間の表面はテラテラに凍ったままで、スキー靴で歩いてても危険なくらいツルツル滑る異様な様相を呈していた。

入り口には戸がなく吹雪が容赦なく吹き込み、多少の風除け効果があつたとし

でも、ここで一晚過ぐすとしたら、凍死は確実と思はれた。ここには長居はできないので一行はゴーグルの氷を払い、口元のタオルから山羊の髭のように垂れ下がった氷柱を折り取り、緩んだベルトを締めなおして、息の詰まるような吹雪の中に再び身を投じた。

避難小屋からは相変わらず見通しが利かず地形はややなだらかになったが、却って風の勢いが強く、流石のガイドも時々立ち止まっては、方向を見定めるようになった。あたりはゴーゴーと吹雪が荒れ狂い、今出たばかりの非難小屋の方向さへ定かでなくなってきた。ホワイトアウトの状態である。

あきらの足は大腿部の筋肉がパンパンに張り、スキーを雪面から浮かす力もなくなったように感じた。その時突然これまで経験したことのないような氷雪の壁が全員の前に立ちはだかり、一步も進めない状況になった。

全員、極端に歩行スピードが遅くなり、前かがみになって苦闘している。気を抜くと身体全体が後ろに押し返される感じで、ストックを身体の後ろに突いて支えるのが精一杯だった。こんな恐ろしい状態がいつまで続くのか？ もう一時間もこんな調子だとスタミナがもたない。どうなっても、誰も助けはくれないうことをあきらは自覚した。

あきらの右前方の濃霧の中に苦闘している三人の人影が見えた。真ん中の女性スキーヤーは数歩歩くとヘナヘナと倒れてしまう。後ろの男性がストックで彼女のザックを叩きながら「起きろ、ここで死んでもいいのか？」と怒鳴っている。これを聞いてあきらはこんなところで死にたくないと思った。急に不安に襲われ、もう直ぐ大学を卒業できるのに、いい会社に内定しているのに、そして瞬間的にめぐみのことを思い、ついで母親の美智子のことを思った。他人のことに構っている余裕は全くなく、あきらの一行はその三人の傍を、無情にも声もかけず通り過ぎた。

「ここが最後の登りだ」とガイドが吼えるように言った。

標高千九百九十四メートルの万座山の裾を巻いて森林地帯に入ると。パタッと風がやんだ。あたり一面墨絵のように色彩がなくなり、うそのような静寂の世界の中で雪だけが激しく降っていた。晴れていたら快適な林間の滑降コースもポロポロに疲れた身には苦難の滑降となった。足にバネがなく深雪のなかでスキーをコントロールできないのだ。何回となく転び、歯を食いしばって起きそしてまた転んだ。ただ、ここまでくれば、と気分的には助かったと安堵の気持ちだった。

ガイドの提携している宿屋にたどり着き、暖かいお茶をもらった時にやっと

人心地がついた気分になった。宿屋の廊下に掛っている寒暖計はマイナス三十三度を示していた。恐らく山頂ではマイナス三十度はあっただろう。

翌日、草津に着いて読んだ地方の新聞によると、昨日は小型低気圧が急激に発達し、各地で記録的な降雪があった由。草津から万座に抜けるコースで新日鉄のスキー部が遭難し女性一名が死亡したとの記事があった。

志賀高原に残った先輩の話では、あの日は急に強風になり、ゲレンデでも滑ることが不能だったとのこと。このことをあきらは家族には告げなかったが、スキーツアーは二度とやるまいと心に誓った。

翌週の月曜日、化学教室ではスキーに行った四人が右頬に凍傷のあとを残して受講した。あきらの黒いアザのような跡は三週間くらいで消えたが、平田の場合にはかさぶたができ、それが剥がれた跡は皮膚の色が白く変化してしまった。

この万座スキーが最後のイベントで、大学では卒論の仕上げとともに実験室の片付けが始まり、あきらは卒業記念のためにと、曾我とはじめた化学科のクラブのアルバムづくりに精を出した。

昨年九月に面接し、採用内定の約束のあった会社から、二月半ばに呼び出しがあり、身体検査やら注意事項の説明を受けたりした。会社では四月一日の入社式後、本社で簡単なガイダンスがあり、その後すぐに三ヶ月の工場実習のため、三重県の四日市工場へ移動し、そのまま新勤務地へ転勤になると教えられた。

あきらの就職スケジュールを知った妹の幸子が、食事中に突然こう切り出した。「お兄ちゃん、卒業したらめぐみさんをどうするの？ 結婚するの？」

あきらは突然の質問に「いや」とあいまいな返事をした。

「でもお兄ちゃん、あんなに手紙をやりとりして、あんなにデートして、このままさよならなんてめぐみさんが可哀想よ。真面目に話したことあるの？」

幸子の追求は急だった。幸子自身やはり大学四年のボーイフレンドの態度が曖昧でイライラしていた。

「あきらさん」と遂に母親までがあきららに向き直った。

「あきらさん、大学卒業というのは貴方にとつて大きな転機ですよ。ここでちゃんと自分の将来のことを考えなければ駄目よ。めぐみさんは、私は一度会っただけだけれどなかなか良さそうなお嬢さんじゃないの」

「うん、でも結婚なんてまだ早いよ。それにもっといい人が出てくるかも知れないし」とあきらは家族には本当のところを素直に打ち明けた。

「お兄ちゃん、あんないい人滅多に見つからないわよ。仮りにいたとしてもその

人がお兄ちゃんを好きになつてくれる保証はないわよ」

「あきらさん、私が十九歳の時お見合いでお嫁にきた時の心境を考えてご覧なさい。貴方なんて何十回も会っているのだから決められないなんて言わせませんよ。自分の事ばかりではなくてめぐみさんのような娘さんを持っているお母さんの気持ちも考えてあげなさいよ」

「お兄ちゃんのお友達の前野さんだつてめぐみさんに気があるようよ。いつか家に遊びに来てお酒飲んだでしょう？ あの時定期入れの中にめぐみさんの写真を持っているの、私見ちゃつたもん」

「もし前野さんが先にプロポーズしたとして、めぐみさんが貴方が煮えきらないからと言ってオーケーしたら、ということだつてあるのよ。今度会うのは三月一日でしたっけ？ そのときちゃんと話をつけなくてはダメよ！」

母親と妹の幸子から集中攻撃を受け、あきらは正直いつて戸惑つた。ただ家族が、それももしかしたら将来の姑と小姑が口を揃えて、この次会つたらプロポーズすべきだと薦めた時は、ふだん口うるさいと思つていた家族が支援してくれるのが嬉しかった。が、素直にそうしようとは思えなかつた。母や妹は俺のために結婚をすすめているのではなくて、女としての立場でめぐみを応援しているのだと思つた。

一方、家族が応援してくれる結婚ならば少しくらい早くてもいいかな、という気持ちもあつた。ただ、こんな簡単に決めてしまつていいのか？とも思つた。

自分が決めたところでめぐみが何て言うのか予想が着かなかつた。現に前野だつてかなり積極的にめぐみをスキーに誘つているし、めぐみも満更ではない様子ではないか？

三月一日になつた。朝あきらが顔を洗つていると母親の美知子が父親に「あきらが今日結婚を申し込むつて云つているわよ。父親としてちゃんと聞いて上げなさい」と囁いているのが聞こえた。

父親は一言「綺麗な子かい？」と母親に聞いているようだった。

いつもなら朝食には必ず遅れる次女の京子もはせ参じ、全員が他所行きの顔で食卓を囲んだ。

「お父さん、あきらがなにか言うことがあるそうよ」と母親の美知子。

皆の視線を受けてあきらがおもむろに切り出した。

「お父さん、あのねえ、僕好きな人がいてねえ、今日……」

ここまできて神妙な顔で聞いていた長女の幸子がたまらずプーつと嘖き出した。

父親も真っ赤な顔をつるりと撫でて、母親にむかつて「照れ臭いもんだなあ」

と言ったので、あきらは最後まで言わずに済んだ。

めぐみとはいつものEという西銀座のお店で会った。ここは午後五時までは豪華な喫茶店だが、六時からハワイアンバンドが入ってダンスができるクラブに変わるので、二人は時々利用していた。めぐみは淡いピンクのワンピースにベージュのオーバーコートを羽織り、同じ色の中ヒールを履いていた。

二人はカクテルを注文したあと、とめない話をするのが常であった。

この日は二、三曲おどったあと、曲の合間にあきらは急に話題を変えて

「ねえ、これは真面目な話なんだけれど。僕と結婚してくれませんか？」と言いながら照れ笑いをうかべた。が、すぐに真顔にかえった。めぐみがマジマジとあきらを見つめたからである。

めぐみは一瞬当惑したように眼を外らせ呟くように云った。

「私達幸せになれると思う？」

めぐみがこちらに向くのを待ってあきら、

「なれないと思う？」

暫く二人とも黙ってしまふ。ぎこちないあきら。

仕方がないといった口調でめぐみが用意していたように口を開く。

「お話有り難う。でも私貴方に知らせてないことがあるの」

あきらはその瞬間やはり駄目かと思った。きつともう誰かと婚約したか、しないまでも好きな人が別にいるのだと思った。家族にも応援して貰ったので、自分でも早いと思っている結婚を無理に自己納得してきたのに、折角現実のものとなりかかったこの愛を壊したくなかった。二人はダンスを止めて席に戻った。

あきらはめぐみの細い指の柔らかい指先をつまんだり離したりしながら、先日スキーで遭難しかかった時の話をはじめた。深い雪の中で重い荷物を背負ったまま転倒して右足首を捻挫し、猛吹雪の中で立ち往生した時、もしかしたらこのまま雪に埋もれてしまうのかと覚悟した。そのときに誰でもない、めぐみのことが真っ先に脳裏に浮かんだことを打ち明けた。そしてもし今日このまま別れてしまうようだったらこれだけは言っておこうと思っていたと告げた。

話をきいてめぐみの瞳はみるみる潤んできた。大粒の涙が頬を一粒、二粒流れた。めぐみはハンカチで目頭を抑えて小さいがはっきりした声でいった。

「今まで隠ってきてごめんなさい。実は私は貴方よりは一つ年上なのよ。山脇学園の大学に少し通ってから、チョット感ずることがあって津田塾大に入り直したので一年遅れているの」

あきらはこれを聞いて正直いってほっとした。他に誰かライバルが居るわけ

ではなかったのだ。だが年齢が思っていたのとは違うと打ち明けられてすぐにそれは問題ない、とは言えなかった。でもすぐに同じ年の嫁さんでも一つ年上の嫁さんでも一緒だと思った。ここまで話をすすめて年が一歳多かったからプロポーズをやめますとは言えるはずがない。あきらは言った。

「めぐみさん、年齢なんか関係ない。もし別に理由があるならこの際はつきり言うてください。偶然北海道で会って、蔵王のスキーに仲間と一緒に行く事になった。僕らの関係は始まった。僕の貴女にたいする気持ちは猛吹雪の志賀高原で固まった。人を好きになれるなんてこんなに素敵なことはないよ。お互いに曲折はあったけど、もうこのウィンターラブストーリーを終わりにしたいんだ」

めぐみはあきらに

「貴方は引っ込みがつかなくて、強がりですべて言っているのではないでしょうね？」と何度も聞き、ただ申し訳ないの言葉を繰り返していた。

話はもうこれ以上進展しなかった。おたがい何かを考えている風情だった。

あきららは「帰る前にもう一曲踊ろう」といってめぐみの手を取った。めぐみは素直に立ち上がった。スローなブルースに合わせて寄り添うめぐみの肩を抱きながら、あきららはこれでいいのだろうかと思った。めぐみはダンスの最中あきららの肩に顔を埋めるようにして泣いているようだった。あきらからは、めぐみの襟元の黒子しか見えなかった。

母親の美知子はあきららが浮かない顔で帰宅したので、結果を聞けずに居た。

妹の幸子も京子も雰囲気を察して沈黙を続けていた。夕食後、女どもの前であきららが状況を報告した。

「めぐみさんは実は一歳年上なんだって。だからよく考えなさいって言うんだ。本当のところ僕はよく分からないんだよ。年上でもいいかお母さんに聞こうと思つて」

「バカねえ。年齢なんか関係ないじゃないの。早生まれかお生まれの違いを気にする人はいないでしょ？ しばらくしたら電話ではつきり返事を聞きなさい」

一週間後あきららはめぐみの職場に電話した。めぐみは丁度良かったあなたに手紙を出そうとしていたので、ちよつと会えるなら会いたいとのことだった。

地下鉄の国会議事堂駅のホームで二人は会ったが、めぐみはすぐに職場に戻らなければならぬからと手紙をあきららに手渡し、あきららに一言も喋べる時間を与えずに黄昏の事務所に帰っていった。あきららは地下鉄の暗い電灯の下でめぐにめぐみの手紙を読んだ。



「あんな形で決定的瞬間がくるとは想像していませんでした。去年の夏いつだったかそんな話が出たことがありましたね。あの時は何となくやむやのうちに終わってしまったけれど、私はあんなことの繰り返しで何となくお別れしてしまうような気がしていました。」

貴方は未だ若いし、私は遅くとも来年中には結婚ということに直面せざるをえないでしょうから、結局はお友達よりちよつと進んだというような関係に留まるだろうと思っていましたし、頭からそう考えざるを得なかったのです。

年齢のことは、決して隠すつもりは無かったにしても、知らないで済ませられればという気持ちはたしかにありました。貴方が学生である間だけのお友達としてすぐお別れしてしまうなら、何も辛い思いをして打ち明ける事もないと自分に都合よく納得させていたのです。

今になってみればエゴイステイックで浅はかな考えでした。その為に貴方に余計な悩みを負わせてしまつて…。

去年の夏ちよつとこの話が出て以来、このことはいつもこころの片隅にひっかかっていました。だから具体的な話になることが恐かったです。お話があつてから一週間本当に色々考えたり悩んだりしました。

私の貴方に対する気持ちはともかくとして、結局貴方にもう一度自由で客観的な立場でよく考えて戴きたいということに落ち着きました。

全てをお知りになった今、やはりお考えも変わると思いますし、変わつても、いえ変わるのが当たり前かも知れません。私に対する心遣いやこの間の貴方の言葉にたいする責任などはすっかり無しにしてご自分の心に忠実にお考えになつて下さい。貴方には新しい社会が待っているし、若くて可愛らしい素晴らしい人が待つて居るかも知れないということが一番に考えにいれて。

私の心はきまつていますが貴方が客観的な立場を失う事を恐れて今日は何も言わない事にします。このことは二の次にして純粹にご自分だけの気持ちを確かめて下さい。その結果この間と違う結論が出てわたしは素直に認められるでしょう。なんだか思っている事の半分も言い尽くせないけれど私の気持ちを貴方ならわかつて下さると思います。

感情を無理にセーブしてへんに理屈っぽいことを書きました。わかつて下さいますね。

あきら様

めぐみ

三月十日

この手紙を読んでもあきらはめぐみの気持ちにピンと来なかった。

「私の心は決まっていますっていうのはOKということよ。断るならこんなふうには書かないわ。あきらさん、東大を卒業しようっていうのに、こんな文章の意味がわからないの？ 今度はちゃんと会ってはつきりしたお返事を確かめていらっしやい」

この手紙を読んだ母親の美知子は、安心したような口ぶりでこういった。そして娘達に向かって「男ってこんな問題になるとからっきしだらしないわね。

貴女がたも心しなさい」と教育的指導を行った。

二日後、あきららは国会議事堂の参議院事務所に近い門で、めぐみを待っていた。忙しいなら五分でもいいから会ってくれと懇願しての末だった。役所内に回覧する書類を持ったままめぐみが近づいてきた。

めぐみはニコニコしていた。

「お手紙読んでくれて？ それでいらしたの？」

「君のハッキリした返事が聞きたくてきたのさ。結婚してくれるんだろ？」

めぐみは下をむいたままニヤニヤしている。しばらく同じ問答を繰り返した後、時計を見てめぐみは「もういなくなっちゃ」と踝をかえした。あきららはブルーのスーツの背中にむかって「結婚してくれると思っていんだね？」と大声で問いかけた。

めぐみはわらいながら振り返り、

「いいわよ」とはつきり返事をして小走りに建物にむかって走り出した。

その一部始終を国会の守衛が見ていた。早咲きの梅が一、二輪風に揺れていた。

四月三日の東京駅のプラットホームはかなり混雑していた。あきららの会社の新社員は総勢三十五人、新調の背広に身を包んでそれぞれの見送りのひとに挨拶していた。

あきららの周囲には父親をはじめとした家族のほか、めぐみ、仰木、久慈、西田の津田勢、明後日岩国に立つという前野、それに川崎の石油会社に決まった森井がいた。彼らはみな今をときめく石油化学、石油精製の会社に就職したのだった。

列車が動き始めたとき、手も振らずにあきらはめぐみを、めぐみはあきらをじつと見詰めていた。めぐみのスーツの黄緑色がいつまでもあきららの脳裏に残った。

速度をあげた列車は新社員達の夢と青春を乗せて、西に向かって驀進した。物憂い春の午後であった。

(あとがき)

この物語は昭和三十二年から昭和三十五年までの都会育ちの若者たちの行動記録である。一見スキーと山登り、ダンスに興ずるだけの浮ついた若者のようだが、現実には真面目な学生達であり、素直な青年たちであった。家庭教師のアルバイトで稼いだ資金をもとに安い学割を活用してスキーや山登りに興ずることが唯一の青春の捌け口であった。冷房のない暑い夏を、せわしない正月を狭い家で家族と過ごすよりは、どんなに自由で楽しかったか。

北海道旅行での出会いの翌年、偶然ゼミの合コンで繋がった一ツ橋大生と津田塾大生との親近感、多分に地理的な関係もあったにせよ、早稲田大と日本女子大、東大と東京女子大の学生間のそこはかとない感情にも共通する。それがきつかけで紆余曲折があったとはいえあきらめとめぐみの生涯を決めたのだから不思議なものである。

それにしても筆者のわがままな行動を黙認してくれた家族、一緒に行動を共にしてくれた友人達に感謝したい。周囲の人に本当に恵まれていたと思う。

またなによりも、未婚化や晩婚化が進んだ当今では考えられないほど深刻であった年齢の問題を押し隠して、多くの手紙やはがきを書いては送ってくれ、こちらからの手紙を長期間保管してくれていた妻にも感謝したい。この書の半分以上は彼女からの手紙がもたっているのだから。